

帝劇

第八十五號

昭和四年十二月

卷頭談

山本專務

帝劇十二月興行御案内

東京行進曲

福原信三

追憶の銀座

近藤島像

丸の内思ひ出話

桐島泰一

ラツシ・アラーと薔薇

神川欣一

銀座の話題

古川緑波

昔譚淺草行進曲

小笠原總松

『變る新宿アノ武藏野の』

伊守濱

『西遊記』に就て

坂田米

繪本西遊記に就いて

梅勘

東京行進曲

雪彌

森律子

小林延子

村田嘉久子

村田美彌子

初瀬浪子

江原君子

河村菊江

小村京子

藤間房子

村田京子

香羽兼子

小村京子

橋 薫

小村京子

村田竹子

小村京子

明石久子

小村京子

春日明子

小村京子

江原君子

小村京子

小村京子

小村京子

喜多島貞子

小村京子

ミゲエル・フレタ氏獨唱大音楽會

小村京子

ミゲエル・フレタ氏獨唱曲目

小村京子

ミゲエル・フレタ氏獨唱曲目解説

小村京子

日本の好樂家諸賢に

小村京子

新築地劇團第五回帝劇公演御案内

小村京子

第五回帝劇公演に際して

小村京子

脚色者として

小村京子

戰爭劇の流行

小村京子

一兵卒であつた私

小村京子

古今藝談思出草(其二十)

小村京子

奥村五百子

小村京子

帝劇だより

小村京子

セゴツア氏大音楽會

小村京子

赤十字社慈善興行

小村京子

萬國工業大會參列者觀劇會

小村京子

セゴツア氏告

小村京子

別大演奏會

小村京子

洋樂部第一回管絃樂演奏會

小村京子

勘彌、加藤の文藝座出演

小村京子

愛國婦人會東京支部

小村京子

慈善興行

小村京子

高峰筑風氏の御好意

小村京子

西條、中山兩氏の御好意

小村京子

嘗て帝劇に來演せる海外大藝術家消息

小村京子

海外劇界ニニース

小村京子

藤澤周次

小村京子

獨逸劇壇消息

小村京子

ソウニートロシアの劇界舞踊界

小村京子

中根英弘

小村京子

セゴツア氏ギター演奏會新聞評

小村京子

帝劇十一月興行新聞評抜萃

小村京子

消息

小村京子

日誌

小村京子

表紙

小村京子

薄拙太郎

小村京子

(一)

小村京子

(二)

小村京子

(三)

小村京子

(四)

小村京子

(五)

小村京子

(六)

小村京子

(七)

小村京子

(八)

小村京子

(九)

小村京子

(十)

小村京子

(十一)

小村京子

(十二)

小村京子

(十三)

小村京子

(十四)

小村京子

(十五)

小村京子

(十六)

小村京子

(十七)

小村京子

(十八)

小村京子

(十九)

小村京子

(二十)

小村京子



帝劇だより

宮殿下の御臺臨

セゴヴィア氏大音楽會へ

世界獨歩のギターリスト、アンドレス・セゴヴィア氏大演奏會は十月二十六日より二十八日迄の三日間大盛況を以て迎へられました。第一日二十六日には左の宮様方の臺臨を辱うしました。セゴヴィア氏は申すに及ばず帝劇の光榮の至りとする處で御座います。

- 朝香宮妃殿下
- 朝香宮紀久子女王殿下
- 北白川宮美年子女王殿下
- 北白川宮佐和子女王殿下
- 竹田宮禮子女王殿下
- 李王娘殿下



同徳惠姫

日本赤十字社東京支部

兒童保健事業基金募集慈善興行

日本赤十字社東京支部の兒童保健事業基金募集として慈善興行が十月二十九、三十の兩日午後五時半より開催されました。番組は

- 一、挨拶(會長伯爵松平頼壽氏)
 - 一、長唄「勸進帳」
 - 一、舞踊「鶯娘」
 - 一、義太夫人形「千本櫻道行」
 - 一、英語劇「聖ジョオン」
 - 五幕
- で、二階大廣間にはバザーも開かれ、三十日には朝香宮妃殿下、同姫宮殿下、閑院宮若宮妃殿下、李王娘殿下、同徳惠姫、各宮殿下の御臺臨もあつて非常な盛況でありました。

萬國工業大會參列者觀劇會

十月末より開催されました萬國工業大會に參列の二十七國代表の各氏並びに各國大公使を主賓として、東京商工會議所主催の觀劇會が十一月四日夜帝劇に催されました。場内外は萬國旗と杉葉に飾つた歓迎イルミネーションに美はしく粧はれ、八時半より左の順序で開演されました。坪内逍遙博士作「金毛狐」(十月、興行に上演)、挨拶、休憩、河竹默阿彌翁作「三人吉三」大川端の場並に本郷橋捕物の場。

尚場内食堂五ヶ所には夫々裝飾された茶菓接待室が開かれ、特に帝劇專屬女優全部は、接待員として斡旋しました。主客共に歡を盡して和氣霽々裡に十一時に會は終りました。寫眞は當日「金毛狐」のあとで舞臺に於ける記念撮影です。

(前列右より)古市公威、伊太利代表ルイギ、藤田會頭令嬢、米國代表スベリー、藤田會頭夫人、東京商工會議所會頭藤田謙一、馬越恭平、杉山義雄、(中列)中村元督、大瀧守雄、大

竹風一郎、根岸耕一、大山斐瑛磨、瑞典代表エストロム、渡邊鐵藏、秋田直吉、高杉龍藏の諸氏と（後列）宗十郎、幸四郎、梅幸、勘彌の諸氏、

セゴヴィア氏告別ギター大演奏會

十月末の二十六日より二十八日まで三日間開演して好評であつた西班牙のギター大家アンドレス・セゴヴィア氏は同演奏會後關西に樂旅をつづけ、十二月上旬米國へ渡航の豫定でしたが、帝劇に於ける告別演奏會の爲め米國の契約を延期して陸路西比利亚を経て瑞西の邸に歸りクリスマスを済まして渡米する事となりました。因みに十一月九日十日の二日間午後一時より告別大演奏會は前の三日に劣らぬ盛況と好評を以て迎へられました。

洋樂部の第一回管絃樂演奏會

大正十三年十月創設されて以來、劇中演奏、幕間休憩樂出張演奏等に不斷の努力と研磨に五年の星霜を経て日本に於ける唯一の婦人オーケストラとして遠くは米國の音樂雜誌にまで喧傳される様になりました我帝劇女子洋樂部は

創立五周年を期しまして、弘田龍太郎氏の肝煎で、劇場関係者、部員父兄をお招き致しまして、十一月十五日午後一時より第一回管絃樂演奏會を事務所樓上の稽古場に催しました。追て近い將來は公開する筈であります。當日來會者百餘名、管絃樂演奏「開催の趣意」（弘田龍太郎氏）祝辭（山本專務、取締役益田太郎氏）御挨拶（女子洋樂部）があつて非常な盛會でございました。演奏曲目は

- 一、管絃樂ピツゲ作序樂「秋の女主」
- 二、管絃樂ヴァルドイフェル作「スペインのワルツ」
- 三、ジャズ——イトビアル作「價千金」
- ロ、トムブソン作「ペルリー編」
- 「アラビアンナ」
- 四、山田耕作作「日本組曲」
- イ、晒し、ロ、お江戸日本橋、ハ、かつぼれ、五、マンドリン樂——
- イ、マン作「ジブシー風間奏樂」
- ロ、カンナス作「スペイン幻想曲」
- 六、管絃樂ベートーヴェン作「交響樂、第五樂、短ハ調、作品六十五」

勘彌・加藤の文藝座出演

十月二十六日より二十九日迄早稲田大隈講堂に演劇博物館の寄附興行として勘彌、まうら竝に一門、加藤精一は藝

術座水谷八重子一派と共演して「大尉の娘」「良寛と子守」「ファウスト」を上演、満員の盛況を得ました。尚加藤精一は十月市村座、十一月本郷座の新劇興行に賛助出演しました。

「奥村五百子」劇に

宮殿下御台臨

十一月興行には御承知の通り、愛國婦人會の創始者である「奥村五百子」女史の事蹟が劇化上演されました。各方面の御好評を得ておますが、二十日には愛國婦人會東京支部と家庭製作品獎勵會の基金募集寄附慈善興行が催されました。當日は、畏くも

伏見宮妃殿下
東伏見宮妃殿下

の御台臨さへもあつて、非常な盛會でございました。

高峰筑風氏の御好意

十一月興行に我が國の愛國婦人會の創始者で且つ又、

一大女傑と世に謳はれておます奥村五百子女史の劇が上演されましたが、女史は肥前の生んだ偉人と云ふので、九州出身の各位の間には、何とかして此の劇の成功を期せようと種々計畫される所がありまして、郷土色に富んだ博多俄など取りいれられ、大いに博多情調をただよはしておました。同じく九州出身であります琵琶界の權威高峰筑風師も自ら進んで、眞の御厚意から無報酬で詩吟を御受け持ち下さいました。帝劇としましては深く師の御厚意を謝しますと共に、師の郷土愛に富まれた御眞情に感激の情を禁じ得ませぬ次第でございます。

西條八十、中山晋平

兩氏の御好意

十二月に上演致します、菊池寛氏原作「東京行進曲」の劇中、日本ビクターから發賣され全國に忽ち普及された、「東京行進曲」は今回作詞者西條八十氏、作曲者中山晋平氏の御好意を得て隨所に演奏される事になつて居ります。

ました。彼女はその後引續き、スポーツの運動やポーズを基調とした新しい舞踊や革命を主題とした舞踊を發表して斯界の注目を惹いてゐます。

そして自分の研究所や舞踊團の仕事の外、國立モスクワ、ルナチャールスキー演劇技藝學校舞踊部の教授として多勢の後身を育成してゐます。一九二七年の五月三十一日と六月一日の兩夜カアメルヌイ劇場で彼女が演劇技藝學校の研究生を使用して演出した新舞踊『盜師イワンと四人のしやれ者』の如きソウエートの代表的な新舞踊として見る可きものです。この舞踊はウラヂミール・マツスの書き下ろしたものにユ・ミリユーチンが音楽を作曲しグシヤチンスキーが舞臺装置を擔當したものです。

第二はウエーラ・マイヤです。

彼女の舞踊の傾向はどこまでもブラストツク・タンツを基調としたもので、彼女も自分の研究所を經營してゐる外、ルナチャールスキー演劇技藝學校の教授としてブラストツクを教へてゐます。

第三はニイナ・チエルニツカヤです。

ニイナ・チエルニツカヤは性格的な舞踊に驚く可き天分を現はした女流舞踊家としてまた按舞家として有名な人です。彼女は現在國立バレエに復歸したゴレイゾーフスキーや有名なルーキン等が未だ新しい舞踊運動に盛に活動してゐた時代、自分の研究所を中心として新舞踊界に非常な勢力を有してゐましたが、ゴレイゾーフスキーがバレエに復歸すると相前後してロシアを去り西ヨーロッパに赴いてゐました。彼女は最近再びロシアに歸つて研究所を開き、自分の新しい運動に着手した相です。

以上の三人の研究所の他、バレエ以外の有力な新しい舞踊學校として前にも記した國立モスクワ、ルナチャールスキー演劇技藝學校の舞踊部をはじめ、タイロフの有名な、カアメルヌイ座に附屬する演劇技藝學校の舞踊部があります。この舞踊學校はア・ルムニエフの主宰するもので、タイロフが新しい舞踊家を養成する目的以外従来の演劇の舞臺にもつと舞踊藝術をとり入れる前提として演劇のための舞踊家を養成する目的で設立したもので、スモリーツ

エフの古典舞踊、ドリーンスカヤ、スイドリロフの性格舞踊、ルムニエフのブラステイツク、ナタリヤ・グランのエクセントリック、アレクセエフの舞踊理論、ボンスの舞踊史、コロローワのリトミックといふ有名な教授の下に、多数の有望な研究生を集めてゐます。この學校が新しい舞踊に對する基礎訓練に非常な力を注いでゐるうちに、この學校を中心とした有力な新しい舞踊運動がタイロフの指導の下に近い將來に於て發生するものと、非常な期待を受けて居ります。

先年モスクワに開設されたイサドラ・ダンカン舞踊學校は、ダンカンの死後娘のイルマ・ダンカンが主となつて繼續されてゐましたが、昨年アメリカで催されたイサドラ・ダンカン追悼記念公演のためにイルマの一行が渡米して非常な好成绩だつたのでイルマはその後ヨーロッパ各地を巡つて再びアメリカに赴く相ですから、モスクワのダンカン舞踊學校も現在では果して依然開かれてゐるか怎うか判りません。

——一九二九年十一月十一日——

セゴヴィア氏ギター演奏會新聞評

都 新聞

セ氏のギター演奏を聴く

外は風雨激しけれど、ホールの中は至つても静かな昨夜、朝香宮妃殿下と姫宮、北白川竹田の兩姫宮、李王兩殿下の七方をお迎へ申上げギター演奏家として世界第一の者セゴウキア氏の獨奏會が帝劇に開かれた七時十分水を打つたやうな静寂な中に、清冽にして甘味ある絃音が起つた、ソル作の「西班牙のうかれ者」である、曲は題名からの想像とは反對で、大向に受くるやうな節もないだけ、ギターストとしての眞價を認めさせるものだといふことであるが、セ氏は、遺憾なく奏し、先づ全く聴衆の心耳を捉へ去つた、聴衆を喜ばした曲の一つは「パカニニの」アレグロ・トランクキルロ」で、此曲が此人に依つて初めて眞價を發揮したかの如くに感ぜしめられた、第二番の五曲は、大抵他の樂器に依つて幾度か聴かされた曲であるので、興味はまた一としば「フーガ」の莊重「カポット」や「メヌエット」

の輕妙「サラバント」の靈妙なる、とりどりにおもしろく、セ氏に捧げた二曲はよくわからないが新味たつぶりなもの、最後のアルベニス作の「物語」は郷土的色彩の濃厚な曲であるのと、デリケートな感情の表現とを、遺憾なく示してくれた、猶ほ今夕も七時から得意の十數曲を演奏する筈(嶺)

中央新聞

セゴヴィアを聴く

田代博

△南歐スペインの誇り、世界的ギターリストたるアンドレス、セゴヴィア氏の來朝は今秋の吾樂壇にとつては、三つの意味に於いて、大なる收穫と言はればならぬ。▽ギターの眞の妙味を初めて味はふことの出來た我々の幸福。これがその一つである。ギターリストの存在の殆どないといつてもいい貧しい我が樂壇へのよき刺戟が、氏によつて大きく投ぜられた事。その二である最後は、世界的音樂家としての眞の藝術による

神蹟たる感激(再び浸り得た喜びである)。△氏の來朝がセンセイショナルな期待を懸けられてゐたことは當然である。二十六日から三日間、帝劇に於る演奏の初夜の曲目を聴くに及んで、益々此の喜びを深くした。△セゴヴィア氏の技巧に就いては既に多くの深さ、それは超人間的な味をさへ持つと言はれてゐるものである。そして、それは正に期待以上のものであり、特に言つて置きたいことは、氏が、よき演奏家であるといふことの上に於いて、まことに得難き獨創家であるといふことである。△素晴らしき個性の飛躍は、すべて正しき演奏の上に働く。その効果は、屢曲そのものをさへ尻目にかけるのである。こゝに個性の豊かさが獨別的な輝きを持つ價値の典型を初めて聴くのである。△當夜の呼物たるフェルディナンド・ソルの「西班牙の浮かれ者」アルベニスの「物語」グラナドスの「舞曲」バガニーニの「アレグロ・トランクキルロ」等、此の

意味に於て稱讚すべき出来榮を示した。パツハの小曲幾つかの軽快な味はひ、更にタルレガの『練習曲』に於てはテクニツクの正確さとそれこそ超人的な力とに驚嘆するばかりである。

△演奏のフォームは、甚だ自然であつて且つ亂れない氣品を持ち、從つて情熱的では決してなく、絶えず一抹の間味ともいふべき温さを具備し續けたのも好感を持つてゐる。
(十二六——帝劇)

東京夕刊新報

セゴヴィアを聴いて

演奏曲目三日間を通じツル、タルレガ、ジュリアーニ等の比較的我國に親しまれてゐた作曲のもので技巧が難澁ではないゆる難曲のため、或は極めて最近研究された此の樂器特有の奏法の二三が明かになつた爲めに手の付けられなかつたものが多い。
たゞ第三日目タルレガが作『セレナータ』か若し『アラビヤ風狂想曲』であれば數年前武井守成氏により發表された事があつたが其の他は全部我國に於て初演である。
從つて此の樂器に親しんでゐる人でなければ眞の批評は無理であらうし、トレモロ、打絃音、フラジオ、ピチカット等總て耳新しいものでそれから起る技巧上の表現効果

は全く嘆稱すべきものがあつた、第一夜を聴いて先づ第一部ではソルの『西班牙のうかれ者』だが元來此曲に限らずソルの曲は旋律的の箇所を見出し難いため一般に親まれなく此の曲も割合に平易な手法で書かれてゐる甚だ生かし難い點で難曲である然るに彼は大變面白く奏したこの原因は彼は此の曲に限らず今迄我國で餘り研究されなかつたブリヂと穴との間に於ける左手の動かし方を巧に使ひ分ける事を我等に教えて呉れたがソルの曲を奏する場合は低音絃の奏し方と共に此の研究は極めて重要でなからうか。同一の音又はこう度でもそれによく異つた効果が現はれて来る。
ピチカットやフラヂレットを最も巧に配し面白く聴かせてくれたのはパツハの『ガボット』で殊に第三部のボンス作『民謡』に於けるピチカットの明快な音はギターにもこう云ふ音色があるものかと我等を狂喜させ新しい世界に導いてくれた。
グラナドスの『舞曲』は全くトレモロの練習曲として全曲がトレモロによつて終止したのが彼の奏するトレモロの美しさは管絃的効果も現はすものと云つて間違なく低音絃の親指の動かし方は彼でなくては出来得ない業であらう。
當夜は豪雨で演奏中濕氣のために絃が盛んに延びて来て絶えず調子を直してゐたが之

二六 新報

セゴヴィアを聴く

游佐 龍彦

ギターの大家セゴヴィア氏の來朝によつてギターなるものがより多く問題にされ、より多く價值づけられやうとするのは結構な事である、ギターの眞價はセゴヴィア氏によつて始めてわが樂壇に示された陶酔的な南國的な、あの音色はわが樂壇にとつて珍しいものであつたに相違ない。
セゴヴィア氏の技術は疑ひもなく完成された立派なものである、多少座へ目勝ちて、危険でない程度のしやれ氣はあり、日本人に持てさうなや、傳染的なデカダンス——たゞもう美しい、このお人好きなギターの自己陶酔(お芽出たい)はお芽出たいが、このお芽出たさこそ私は一切の學の根據とする所であると思つてゐる)さて第一夜ではグラナドスの『短調舞曲』とパツハの『フリーガ』『ガボット』『サラバンド』『アール』等が面白かつた。
セゴヴィア氏は十本の指の外にかくされた

澤山の指を持つてゐる。美しいピアノシモすばらしく早く動く左手の指、役は全くギターを最も自由に出来る體の一部をしてゐる、遠慮なくいへばギターはもつと下品なものだと私は思つてゐた(セゴヴィアの庄屋が鼻鳴まじりにやるものかと思つてゐた)ところがセゴヴィア氏に依つて示されたギターは、多少なりとも下品な所が無いのみかヴァイオリン等と比較して決して劣るもので無い事がわかつた、若しガボットを恐ろしく勇敢に弾いてパツハラしいと自ばれてゐたヴァイオリンの先生達がセゴヴィア氏のガボットを聞いたなら聊か赤面するであらう、規則正しく嚴格ならちにも一脈の音樂的のふん圍氣をセゴヴィア氏は語つてゐる、最後のアルベニス『物語り』などは全くお伽話の營庭の庭でもさまよふ氣がした、私は遠慮なくギターを禮讚し、セゴヴィア氏を禮讚する。

東京朝日新聞

セゴヴィア氏ギター獨奏會

牛山 充

表現上の誇張、虚飾が幅を利かせ、擴聲器の時を得難な振舞ひが何等の抗議にも出會はない時、謙讓そのもの如きセゴヴィアの藝術に接するのは正に奇蹟である。

あの超人的な技巧、溢るゝばかりの南歐の熱がかくまでも高雅な趣味と、穩和なたしなみによつて統制され、如何なる場合にこそ正雅を失はないためしを見出すことは困難である。
超凡の技巧は單なる技巧家の場合において藝術的のバルガリティーに導く危険がある。殊にギターのやうなはつげん樂器の場合においてさうである。しかるにセ氏の藝術より受ける感銘は他の高尚なる樂器の名演奏家によつて與へられるものと同様に高雅極り無い。これは氏の高い藝術家的賦性の發露によるからであらう。
技巧を主とするやうに見える曲においてすらも、微妙な詩的微光に包まれてゐる効果の華麗をねらはうとせず、獨り靜かに自己の魂の窓の下に立つてセレネードを奏してゐる。興に乗ずる時、身外聽衆なく、心中自己を忘じてゐるあのつゞみしやかさこそはフル・オーケストラが最強勢のはうからにもまして心琴を動かす。微風の私語に似たセ氏の藝術に耳を傾け得るものは雷神の叫びを喜んで聞きすてる人であらう。

セゴヴィア氏を聴く

増澤 健美

ギターの能力を以てして、民程美事な表情の音樂を奏し得る人は世界廣しと雖も確かに稀らしいに違ひない。元來ギターの音と云ふものは、少し強く出さうとすれば容易に音が破れてしまふ、從つて充つたダイナミックな變化を得る事は、仲々困難なものだ。ところが、氏はピアノシモ(最弱)の音を非常に繊細にする事に依つて、上述の危地に陥る事なしに巧みにフォルティシモ(最強)の効果を得てゐる。
之は實に氏の右手の素晴らしいテクニツクに依るものであつて、旋律をくつきりと溪かせながら伴奏部で美しい陰影をつけてゆく指の使ひ分けなどは、まさに驚嘆に値するものである。バガニーニ作『アレグレット・トランキルロ』などは此點で最も美事なものであつた、氏の編曲になるパツハの『フリーガ』や『サラバンド』等もよく出来てゐるが、唯、惜むらくはギター特有のポーターメントのために少々センチメンタルな氣分がする何と言つても最も優れてゐたのはトウリナ作『ファンダンキルロ』だ。指整と駒との間を上下して弾く、氏の周到な奏き方もさる事ながら、其優れた解釋表情の美しきこそ、氏の有する最貴重なものである、此技術以上の或るものこそ氏をして今日あらしめたものであり、科學的により進歩した樂器の多くの奏者をして愧死せ

讀 賣 新 聞

セゴヴィア氏は超人である

◇帝劇の初日を聴く◇

超人的存在を空想のみの産物かと思ふのは非常な誤りである。スペインの誇り、ギター奏者アンドレス・セゴヴィアの演奏を聴いた者は、白痴でない限り僕に同感するだらう。

ギターを捧げ持つて悠然とステータジに現れたロイド眼鏡の彼の最初の印象から先づ超人間的の幻想を醸し出す。彼が首をかしげて音を創造するに及んでは驚異を感じるホールでは冷たい金屬性の音の他、ギターの生命たるなごやかな餘韻を失ふのが普通である。この楽器が、極めて微妙な音までよく響かせる。それは彼の楽器が鋼線ではなくに羊腸線を使つてゐる爲めであらうが彼の超人的であるのはその驚くべき技巧に存する。彼の指は、きつと特異な感覺を備へる運動神經とそして筋肉を天恵されてゐるに違ひない。そして彼の右の指は五本以上あるに違ひない。何故か？あの韻音を出す時の微妙な指の振動、又食指、中指、薬指と和聲をそして拇指と小指で旋律を奏するあの技巧は確に五本以上なくては人間

には出来ないものであるから、又ハーモニックスを奏する時の彼の左の指、左指でピチカート、全く彼の指には獨異の感覺と神經と筋肉とが存在してゐるとしか考へられない。この技巧と相俟つて彼の表現は豊富な色彩と變化に富む明暗と超近代的の感能に溢れてゐる。

彼の演奏を聴いて伊藤孝氏は所詮日本人は如何なるものにも世界的にはなり得ないと嘆息した。いや、日本のギター奏者が彼の域に達するのは全然不可能でも、彼の演奏は日本のギター界に異常な刺戟と貢獻とを齎した。假令へば羊腸線の使用と云ふ一事だけでも。(路吉)

東京日日新聞

セゴヴィア氏のギター獨奏

野村 光一

セゴヴィア氏はこの九、十兩日またギター獨奏會を帝劇に催す、セゴヴィア氏のギターは全くユニークな演奏である。恐らく世の中に斯程繊細な音楽はあるまい。それは聴衆の微かな呼吸一つさへその妙なる美しさをきづつるほどに淡い。しかしながら良く聴けば、氏はこの量においてキヤバシテイの最も妙い小樂器から恐ろしく多くの變化ある音色を表現し得るのである。會て

一英批評家のいへる如く『氏のギターは無数の樂器の音を持つ。氏がそれを指先で軽く觸ればそれはハーブの音となり、胸の近くを擦ればスピネットとなり、フレットの一端ではクラヴィコードのトレモロと化し解放絃ではヴィーナとなり、マンドリンとなり、太鼓の連打音となる。氏がまた一二の音を掻き鳴らせば、それは數百の音が鳴り響くやうに感じられる』これは全くこの世ならぬ不思議な秘術である。氏はまたインテリブターとして非凡の才能を持つ。氏がギター傳統の樂曲ソル、タルレガを或ひはまたパツハの如き純粹な古代樂曲を演奏する時、氏は最も健全な傳統音樂の解釋者となつてフィギアターを妙にも壊さず最も正確なテンポ、リズムの演奏をする。然るにまた他面スペイン派の近代樂曲を深く時には最も近代的スペイン式の正しい意味のデイスフィギエーションを行ふのである。斯くの如く、古代樂曲と近代樂曲とを眞體に徹して明瞭に弾き分ける事は獨り偉大な、藝術家にのみ許さるべき技である。今度の演奏會もまた期待すべきものがある。たゞ會場が氏の餘りに繊細な幽雅な音樂には多少廣過ぎる事は、氏の演奏を充分効果あらしめぬうらみがある前回にもさうであつたから、今度もまたそれがやはりはせぬかと案じられる。

帝劇十一月興行新聞評拔萃

東京毎日新聞

女丈夫奥村五百子と

『合邦』と『三人吉三』

初風生

久しぶりで仁左父子の加入した帝劇の本興行には、一番目に愛國婦人會を設立した明治の女丈夫『奥村五百子』を三幕六場に脚色して上場した女史が維新前からの活躍と明治十年の西南戦争前後の動靜と、日清戦後の婦人會設立までの盡すいと三時代に分けて、梅幸が其五百子で努力してゐるが元來が特種のもの、烈婦貞女劇は興味の上から面白いものでないがそれを可成に筋に變化を持たせて故まて運ばしたのは、相當に骨が折れた事であらうと思ふ、北清事變の際の我が陸軍隊の苦境を説いて群集に節約を勧誘する處は、此劇としてのヤマであるが、見た目の上からは矢張り其若い時代の馬關の奇兵隊の陣所や福岡の城下などが芝居として纏まつてゐて一般には喜ばれる西南戦争勃發時代の兄圓心との事件も人と

人との應對に面白味があるが、劇としての筋の運びにはさしたる興味もな、大詰の偕行社大廣間は『春日局』の大詰を現代で行つたやうなもの、功成り名遂げての女史の花やかな隱退を見せたまでである、唯茲ま一来るのに、幸四郎の西郷や宗十郎の高杉や、勘彌の圓心や、俳優の役としても相應に大きい人物を點出してあるので、見た目の合邦は段々動きが少くなつて、枯淡一方の人物になつたが、此人としての味はある、幸藏の女房も此動かぬ合邦を相手にして、極り／＼の型をきちんか演出してゐる點は忠實である、芝鶴の淺香姫に我當の俊徳丸は釣合のとれた年輩で、我當の床に乗つた臺詞の調子がよく取れてゐるのは義太夫を稽古した手柄であらう、勘彌の入平は力を入れてゐるのが引立つ、梅幸の玉手は得意のものでしん／＼たる夜の道』の出入りに繪に描いたやうな味があつた、家に入るから髪の色氣、俊徳に對する口説き『蘆の浦々』などは、後に立つて廻る

と云ふ型から離れて、變つた運びをつけ、『嫉妬の亂行』は大狂亂染みずみずそれだけの高潮點を出してゐる、落入りは割合にあつさりしたものが、總て形の整然としてゐるのは、流石に此優の演出である。二番目には『三人吉三』が上場された、此三人吉三に選ばれた三人の役者、幸四郎の和尚、宗十郎のお嬢、勘彌のお坊と、役はよく揃つてゐるが、それだけに見ておいていゝと思ふのは、序幕の川端の三人の出合だが、宗十郎のお嬢のおとせを投げ込んでからの『月も朧』の例の名臺詞の變り目のはつきりしてゐたのお坊との出合もきつぱりして、此二人が思ひの外によくしてゐるが、幸四郎の和尚は臺詞が初日でもまだ途切れるのが、興を薄くする、幸藏の傳吉に田之助の十三郎、芝鶴のおとせ役は皆俯つてゐる。

都 新 聞

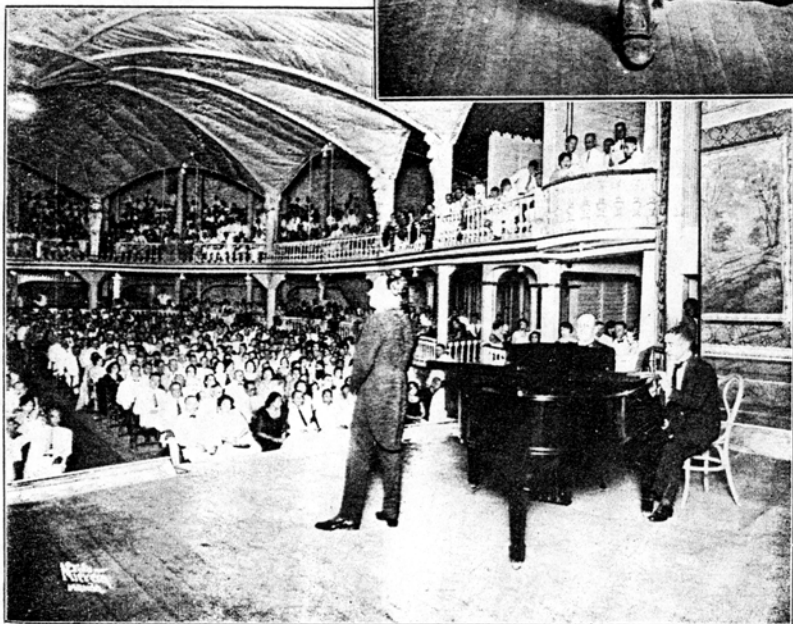
合邦が見もの

青々園

氏タレフ・ルエグミ

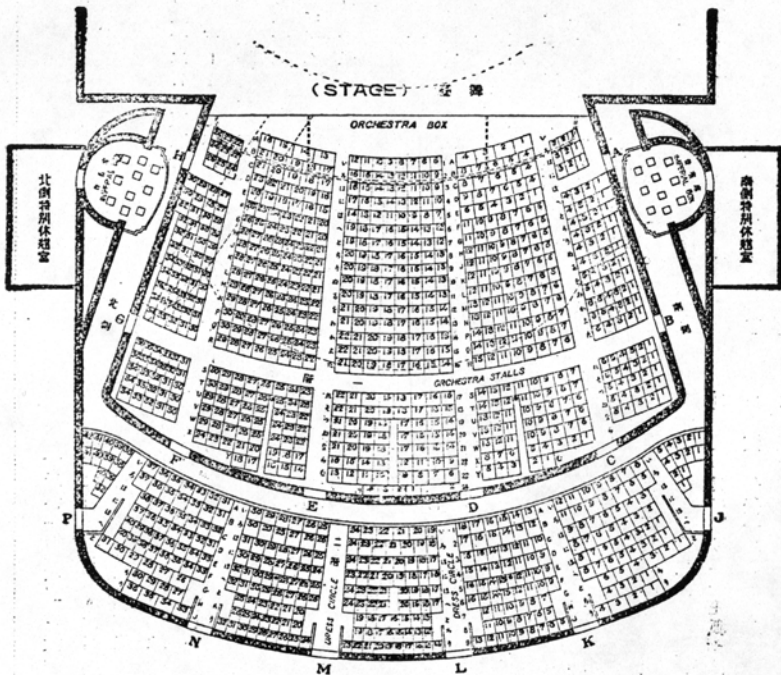
ルーノテ大的界世

一ネチマ日三廿月・十
演開時七夜日六廿同



○カルメンのホセに扮したフレック氏
（三）演う全大マニラにと観員の喜見の點有

帝國劇場座席表



前賣切符

各階座席券は十日前から、豫約、並に發賣致します。

御用命の電話は

九の内(二三) 自三七三〇
至三七三八

昭和四年十一月二十一日印刷
昭和四年十一月二十三日發行

【一部金二十銭】

編輯者 東京市麹町區丸の内三丁目十三番地
行經者 宇野四郎

印刷者 東京市芝區芝町三丁目十二番地
中野鏞太郎

印刷所 東京市芝區芝町三丁目廿二番地
東洋印刷株式會社
發行所 東京市麹町區丸の内三丁目十三番地
帝國劇場文藝部

御客様用電話

御觀劇中の御客様に御用の際
御呼び出し電話は

九の内(二三) 三七四〇(南側)
三七四一(北側)